
soundless voice

嵐炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o u n d l e s s v o i c e

【コード】

N 0 9 6 2 Z

【作者名】

嵐炎

【あらすじ】

迫り来るあの方の最後。

迫り来る親友の最後。

迫り来る標的の最後。

迫り来る生徒の最後。

声を出せずに叫ぶ。

プロローグ（前書き）

こちらは

「soundless voice」で他の守護者やリボーンがメ
イン視点です。

プロローグ

今日最初に見たツナの顔は、何だか儂い表情をしていた。

「…何かあったか、ツナ」

「…やっぱりお見通しか」

ツナはオレにある事を話してくれた。

今日、死ぬ事を。

…信じられねえ。

そんな事、信じたくもねえよ。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。

「…そうか。ついに来たのか」

こんな言葉、言いたくねえ。

「…うん」

「うん」とか言うなよ。

泣きたくなるだろ。

「…大丈夫か？」

「…今も信じたくないんだけどね」

そりゃそうだ。

いきなり夢で今日死ぬなんて言われて大丈夫な奴なんかいるはずがねえ。

「…とりあえず起きようかな」

ツナは体を起こす。

一瞬どこか痛そうな顔をしたが、すぐに普通の顔に戻した。

「だな。皆下で飯食ってるぞ」

「うん、行こっか」

苦笑してツナは言う。

「…先に行つててくれ」

ツナは不思議そうな顔をしたが

「分かった」

と言って下に降りていった。

軽く壁を蹴った。

「…くそっ」

何で。

何でだ。

何で病気はツナを選んだんだ。

まだ24だ。

なのに…

いくら何でも…早すぎるだろ…？

まだツナも生きていたはずだ。

他の奴らと笑っていたはずだ。

なのに。

どうして病気は悪戯をするのだろうか。

シャマルのトライデント・モスキートでも回復は望めなかった。

また壁を蹴った。

泣きたくなる。

でも一番辛い思いをするのは俺じゃねえ。

真実を何も聞かされていない他の守護者だ。

特に獄寺や山本はかなりのショックを受けるはずだ。

いつも一緒にいたから。

そのメンバーがいきなり居なくなってしまう。

そう考えると、あの二人が可哀想で仕方ない。

だから泣くわけにはいかねえ。

でも

俺だっでずっとずっと一緒にいた。

あの二人より長くいた。

…少しぐらい

泣いたっていいよな…？

「
…っ
」

床に水滴がぽたぽたと落ちる。

声を殺して俺は泣いた。

誰かが階段を降りてきた。

その正体はすぐに分かる。

「おはようございます。10代目」

「おはよう」

「朝ごはん、出来てますよ」

「ありがとうございます」

10代目は席につくと、しばらく朝ごはんを眺めていた。

「…10代目？どうかなされましたか？」

「ううん、何でも」

トーストを口に運ぶと、10代目は少し微笑んだ。

「…気のせいだろうか？」

いつもより行動がゆっくりしているような気がするの…。

「10代目、何かありましたか？」

「ん？…いや、何でもないよ」

「そうですねか…今日の10代目はいつもと比べて行動がゆっくりなの？…」

「今日は少しゆっくりしていたんだ」

「そうですねか」

よかった。そういう事か。

「…ねえ、獄寺くん」

「何ですか？」

「もしもさ…オレが…」

そう言つと10代目は黙ってしまった。

「もしも…？」

10代目は何か言いたげだったが、少し開いた口を閉じ、

「…やっぱり何でもないや」

と苦笑して言った。

「そうですね…」

その後はいつもより少し長めに朝ごはんを食べていた。

「「ごちそうさまでした」

「俺が片付けておきますね」

「ありがとうございます…」

食器を流しに置き、洗おうとすると

「ねえ、山本とかはどこにいるか分かる？」

と聞かれた。

「アイツは確か…芝生頭とジョギングに行きましたよ。多分そろそろ帰ってくると思いますが」

「そっか。ありがとう」

と言って10代目は部屋を出ていった。

やっぱり何かおかしい。

皿を洗いながら色々考えてみる。

よくよく思うと今日の10代目の表情はいつもと雰囲気違った。

いつもは周りの雰囲気は暖かくなるような感じ。

だけど今日は表情が少し曇っていた気がする。

色で例えるなら薄暗い水色。

何か話せない事でもあるのだろうか…？

気になって仕方ない。

早く皿洗い終わらせて、他の奴らにも色々聞いてみよう。

やっとジヨギングが終わった。

6割は雪合戦だったかもしれないけど。

「極限に寒いぞ!!!」

とあまり寒そうに見えない先輩が言う。

「中に入れば暖かいつすよ、きっと」

と軽く受け流しておく。

そしてドアを引く。

「あー、暖けえ」

「おお、極限に体がポカポカしてきたぞ!!!」

早いなあ…。

まだ入って10秒も経ってないのに。

するとどこからか小さな笑い声が聞こえた。

「? 誰かいるのか?」

すると壁からひよこつと顔が出てきた。

「二人ともお帰りー」

「なんだ、ツナか。ただいま」

「極限に沢田ではないか！！今帰ったぞ！」

俺と先輩はほぼ同時にツナの頭を撫でた。

「やっぱり外寒い？」

「ああ、急に降ったからあんまり走りたくなかったけどな」

あ、やべ。つい本音が。

誘ったの俺だから何か言われるかな？

「だが途中で雪合戦をして、極限に楽しかったぞ！まるで子供の頃に帰ったようだったな」

よかった。聞こえてなかったらしい。

「オレもやりたかったなー、雪合戦」

ツナはそう言いながら俺と先輩の手を握る。

ああ、暖かいな。

…ん？熱い？

「ツナの手、熱いな…熱あんのか？」

そう聞くとツナは笑いながら

「ん？今日は大丈夫だよ。てかずつと外にいたんだから山本の手が冷えてるんだよ」

と答える。

「あ、そっか」

「最近沢田はずっと熱があったからな！極限に心配したぞ！」

ツナは昨日まで熱を出して寝込んでいたから、一階で会うのは何だか久しぶりだった。

「ツナが完全復活したら一緒に雪合戦しような」

「極限にいい案だな！！約束だ！！」

「本当？嬉しいな」

ツナは嬉しそうな顔でそう言った。

でもしばらくした後、その表情は少し暗くなっていた。

何かあったのか？

「…ツナ？」

「極限に今暗い顔をしたが、何かあったのか？」

先輩もどうやら気づいたらしく、心配そうに声をかけた。

するとツナは少し驚いたような顔をした。

すると焦るように

「何でもないよ！あ、用事思い出したからオレ行くね！」

と言って二階に駆け上がっていった。

「極限に今日の沢田はどこか変だと思わないか？山本」

「確かに…」

ツナが二階にいった後も俺達は玄関から動かなかつた。

いつものツナなら

「すぐに負けそうだけどね」

とか言いながら苦笑するはずだ。

何か…あつたのか？

色々悩んでいるとダイニングから獄寺が出てきた。

「…お帰り」

「あ、ただいま」

そして少しの間だけ沈黙があつた。

そんな中

「なあ…」

獄寺が口を開く。

「今日の10代目…何かいつもと違うかい？」

「獄寺もそう思うのか？」

「ああ…朝も何か言いたげな顔をしてたが結局何も言わなかったからさ…しかも少し暗い表情で」

「こちらと一緒に雪合戦しようとして約束をした後に最初は嬉しそうに顔をしたが、なぜか暗い顔をしていたぞ…」

「…何かありそうだな」

そうして俺と獄寺と先輩は静かにツナがいった二階へと上がっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0962z/>

soundless voice

2011年12月26日01時52分発行